

奥穂高岳に登ってきました

お盆休み(8月13日~16日)に、家族4人で、奥穂高岳へ行ってきました。4泊4日の旅です。

穂高連峰は、日本第3の高峰、奥穂高岳(3190m)を盟主に、北穂高岳(3106m)、涸沢岳(3103m)、前穂高岳(3090m)、明神岳(2931m)、西穂高岳(2908m)などからなり、その山すそを梓川が走り、有名な上高地を抱えています。

わが家では、1989年から毎年、この時期に家族で登山を楽しむことを恒例にしています。最初の年は、蓮華温泉から白馬岳をめざしましたが、雨に降られ、天

狗の庭で引き返しました。この年、長女は7才、次女は4才でした。

3年前に一度、穂高をめざしましたが、頂上直下2989mの穂高岳山荘で引き返しています。今回は、そのリターンマッチです。長女にとっては2度目の、妻と次女は初めての3千m峰です。

今年は、長女に10kg弱の荷物を持たせました。色々いいながらもかつぎ通したのを見て、少しずつ成長していく姿を見ました。(親バカかな)

上高地から涸沢へ

十二日、急いで荷物を車に積み込む。糸魚川から姫川を遡って、大町市へ。広域農道に入り、島々から沢渡へ。二三時四五分着。この村営駐車場で車中泊。すでに駐車している車の屋根には夜露がいつぱいに着いている。

十三日、五時前から、タクシーを待つ長い列ができていく。六時四五分、やっと順番が来て、乗車。上高地のバスターミナルも河童橋も観光客でにぎわっている。梓川も水量が少なく、川原が広い。八時、身支度を整えて、歩きはじめる。

2.5kmを約四五分で明神池入り口。ここ明神池は、穂高町の穂高神社の奥宮になっている。もう、日射しが暑くなってくる。

梓川沿いの道は、時々開けて、明神岳が大きな姿を見せている。3.5km約一時間で徳沢着。ここは広い草原になっていて、「氷壁の宿」で有名な徳沢園がある。この水場の川も、干上がったいた。

樹林を抜けていくと梓川を対岸に渡る新村橋が出る。板の隙間から下の流れが見える。つり橋である。前穂東壁などを攀じる人たちがよく利用する。

4km一時間十分で横尾。右の槍沢と左の横尾谷の合流点である。1510mの河童橋から1620mの横尾まで、約10km。多少の起伏はあるが、ほとんど平坦な道である。通常三時間のところを三時間半。子連れ旅としてはまあまあか。十一時半を回ったので、木陰で昼食とする。少し傾いた橋を渡って、横尾谷に入る。護岸で道が付け替えられている。日射しは益々熱い。正に、灼熱。それでも木陰に入った時に吹いてくる風は心地よい。

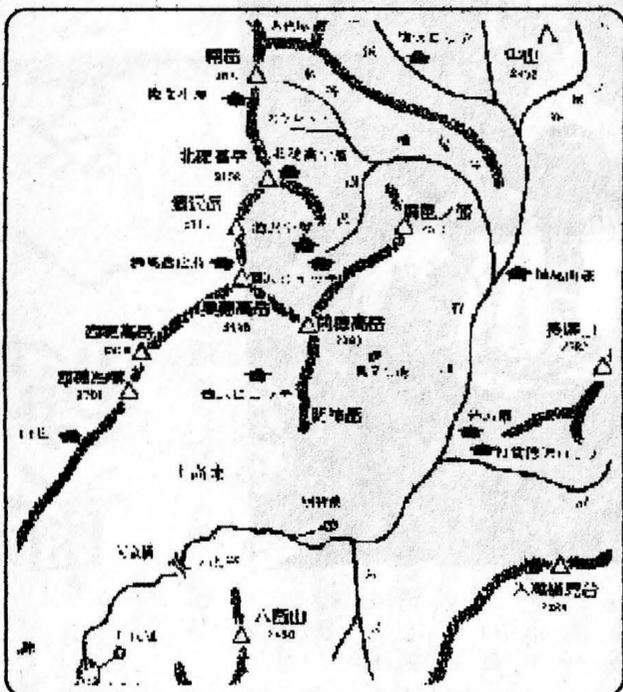
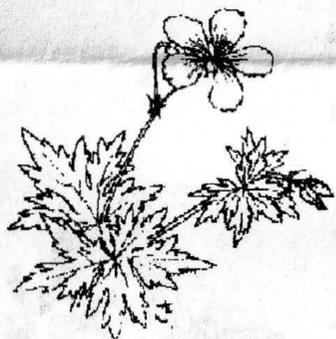
見ながら、本谷の橋へとむかう。この橋、かつては丸木橋だったが、今は、鉄製に変わっている。この橋のたもとが格好の休憩所になっていて、たくさんの方が休んでいた。以前飲めた冷たい清水も今は何故か飲めない。横尾本谷は、この橋の上流から右に折れ、北穂へ伸びている。左に分岐しているのが涸沢である。急登が始まる。ここが今日の最大の関門である。七曲りほどするとようやく傾斜も緩くなる。樹種が変わり、樹高が低くなる。前方に涸沢の残雪が見えはじめ、やがてヒュッテの赤い屋根が見えてくる。もう一息だが、日ごろの不摂生がたたって、もうバテバテ。

十六時三十分、ようやくテント場につく。涸沢の標高は、約2300m。ここに500m四方ほどの岩原が広がっている。そのほぼ中央に涸沢ヒュッテがあり、環境庁の管理事務所なども設けられている。右手の山ざわには、涸沢小屋がある。正面に雪田が広がり、その上に奥穂から前穂へつづく吊尾根がかかっている。奥穂から右に下ったところに穂高岳山荘の屋根が見え、涸沢岳から、ひときわするどい涸沢槍を経て、北穂へと稜線が続いている。前穂は頂上から北尾根が派生し、2峰、8峰まで続き、末端は、屏風岩になっている。そして、登ってきた谷の向こう北東に常念岳が座っているのである。三方を穂高の峰々に囲まれた涸沢には、また、たくさん高山植物が花を咲かせている。このテント場には、すでに、百をはるかに越える色とりどりのテントが立ち並んでいる。トイレや水場に比較的近いところにテントを設営する。突然の夕立。やんだ後は、すがすがしい夕暮れである。



別天地、涸沢

涸沢は、標高が高いだけでなく、物価も高い。3600ccの缶ビールが、550円。500cc缶が700円だ。ジュースも350円している。ヘリで荷揚げしているためである。この物価高に、ここでは誰もクレームをつけない。8月の今ごろ、ペルセウス座流星群が現れる。子供たちは、テントの外で夜空を見上げて、「流れ星！」と叫んでいた。



奥穂へ登る

快晴。朝早くから奥穂へ、北穂へとたくさんの方が列を作って登っていく。

8時、強い日射しの中を奥穂へ向けて登りはじめ。涸沢小屋を経て、ナナカマドの林に入る。岩で作った石畳を登っていく。濃紺のイワギキョウが美しい。オンタデが赤い実をつけ、チングルマも毛を車状にひろげ、風になびかせている。カールを右から左に石畳を踏んで横切り、ザイテングラードの取り付き(2650m)へ。稜線の広場の上がると何人もの人々が休んでいる。

ザイテングラードは、涸沢カールの中央から穂高岳山荘へ直登する、高度差350m地図上の距離500m程の急傾斜の岩稜である。いつもしんがりから遅れてついてくる妻が、今日は先頭を調子よく登っていく。鎖場があり、はしごを登り、やがて山荘が間近に見える。鐘をたたく音が聞こえる。

テントを出て2時間半で、山荘前に飛び出る。妻と次女が、鐘をたたいて広場に入っていた。穂高岳山荘の前はたくさんの人でにぎわっていた。石畳に設けられた1.5m程の円形の石のテーブルに陣取る。早速、缶ビールとジュースでのどをうるおし、昼食をとる。ここの物価は涸沢と同じ。

奥穂へ向かう。5m程のは

しごが2連、垂直に立っている。そして右へトラバース(斜面の横断)。狭いところを上から下りてくる人たちと擦れ違う。ルンゼ(岩の間の狭い溝)を岩に手をかけながら直登すると、傾斜が緩くなつて、核心部の終了である。

奥穂高岳の頂上もたくさんの人だ。3192mの北岳を追い越そうと、頂上に積み上げられたケルンの上に何人かいて、その中に妻と長女もいた。思い思いに写真を取る。西穂方面から来る人あり。前穂から岳沢へ下るといふ人もいる。穂高の峰々はみな雲の中だ。四五分も頂上で遊ぶ。下りは、登り以上に慎重にする。例のはしごで渋滞してしまつた。上りと下りの2本のルートが必要どころだ。下からの大部隊を先に登らせる。山は、常に「登り優先」だ。最近このルールをわきまえないものが多い。

再度、山荘前で休む。相変わらずの人だ。そして、ザイテングラードを下って、涸沢へ。涸沢小屋で飲み物を購入して、テントに戻る。夕食の準備をしていると、テント場代を集めてきた。大人500円、子供300円。赤い夕焼けになって暮れていった。

上高地小梨平

十五日は、上高地小梨平泊りなので、ゆっくりと出発する。

日が昇ると相変わらず暑い。連日の天気ですっかり日焼けしている。いろんな人と追い越したり追い越されたりしながら、本谷の橋に着く。もう、大きな下りはない。樹林に入った時と、日当たりに出た時との落差が大きい。今日もまた、屏風岩に取り付いているクライマーがいる。

横尾で昼食。暑さしのぎに缶ビール(400円)とジュース(200円)を買う。標高とともに物価も下がる。

徳沢の手前で元会員の池田さんに出会う。これから槍方面に行くという。所々の緩やかな上り坂が、帰り道では、精神的に嫌になる。「よし」と気合いを入れて一気に登るのがコツと教

える。

明神入り口まで来ると、もう下界のにおいがしてくる。騒然としていて、歩いている人の衣装も違ってくる。

上高地の小梨平野営場は、広い林の中だ。届けをしてからいい場所を探す。水場とトイレにほど近い広場の片隅に設営する。先客の若者たちが元気だ。自転車の3人組がやって来て、隣にテントを張る。障害者を含む親子。夫婦連れ。それに若いカップル。これがわがテントのご近所である。蚊取り線香を焚いて、ホットケーキを焼く。いつもぎりぎりの食料計画なので、最終日になるとろくなものが残っていない。

小梨平の夜は、遅くまでにぎわっていた。



帰路につく

朝の上高地は格別だ。朝日が、木々の間からさし込んでくる。風に朝もやが揺れる。光も揺れる。

梓川の川原に出てみる。水量が少ないため、簡単に中洲まで行ける。小さな流れに小魚(いわなの稚魚か)がいる。

ビクターセンターで植物や鳥の勉強をし、河童橋で遊ぶ。バスターミナルで昼食になり、食後、タクシーで沢渡へ。逆巻温泉まで戻って、入浴する。

鬼無里から戸隠にぬけて、帰宅する。